



# 施設だより

ひこね市文化プラザ ☎26-8601 FAX 26-8602

9月の休館日： 6月、13月、21日、27日

## ★★★ 注目のイベント ★★★

9月9日(木) 19:00～ エコーホール

### 東京銘曲堂プラス

2009年のサマーライブで好評を博したジャズスタンダードのベテラン3人によるユニット、東京銘曲堂(TMD)。今秋はゲストにトロポン奏者・片岡雄三を加え、ひこね市文化プラザに満を持して再登場さらに、当日限定でロビーにドリンクコーナーを設置、ドリンク(酒類含)を販売します。一杯飲んで、ジャズをお楽しみください。※飲酒をされる場合は車までのご来場を固くお断りします。



【指定】一般3,000円、SP価格1,500円 【チケット発売中】

10月11日(月) 15:00～ グランドホール

### ドラマチックコンサート NHK大河テーマ曲&運命

第1部は、2010年放映中のNHK大河ドラマ「龍馬伝」のテーマ曲を指揮する広上淳一が、往年の大河ドラマの名曲にトークを交え、その魅力に迫ります。また、第2部は、クラシックの王道をいくベートーヴェン作曲の「運命」です。大河ドラマのヒーローたちが迎えた数奇な“運命”を感じながら、ごたんのうください。



【指定】S席6,000円、A席5,000円 【チケット発売中】

9月4日(土) 18:00～ グランドホール

### 宮川彬良&大阪市音楽Dahhhhn!

【指定】一般4,000円

9月11日(土) 15:00～ グランドホール

### 宝くじコンサート～シューマン生誕200年～ 大阪交響楽団演奏会

【指定】一般3,000円、高校生以下1,500円

9月26日(日) 15:00～ グランドホール

### BOROコンサート「不老不死な物語」

【指定】5,000円

12月12日(日) 15:00～ エコーホール

### 外山啓介オール・ショパン・ピアノリサイタル

【指定】一般3,000円、SP価格1,500円【9月5日(日)発売開始】

12月19日(日) 14:00～ グランドホール

### 第13回ひこね市民手づくり第九演奏会

【自由】前売券1,500円、当日券2,000円【9月19日(日)発売】

11月10日(水)、17日(水)、24日(水) 19:00～ メッセホール

### ひこね市民大学講座2010

#### 歴史手習塾 セミナー4

#### 「天下人と近江の戦国武将」

講師：小和田哲男（静岡大学名誉教授）

【自由】一般3,000円、SP価格1,800円【9月12日(日)発売開始】

### そのほかの催し物も好評発売中

チケットのお申し込み、お問い合わせは

チケットセンター ☎27-5200 (9:00～19:00)

インターネットでも購入いただけます。http://bunpla.jp/

## 彦根城博物館

☎22-6100 FAX 22-6520

9月の休館はありません。

※9月1日(水)、同2日(木)および

9月28日(火)～同30日(木)は展示替え

のため、展示室を一部閉室しています。

開館時間 8:30～17:00 (入館は16:30まで)

9月3日(金)～9月28日(火)

## 「井伊家伝来茶道具名品選 —名物茶器から直弼まで—

大名物「宮王肩衝茶入」から幕末の大老井伊直弼の著作まで、井伊家歴代が愛した茶道具の名品を一挙に公開します。



▲宮王肩衝茶入

テーマ展

ギャラリートーク

### 「井伊家伝来茶道具名品選 —名物茶器から直弼まで—

9月4日(土) 14:00～15:00

解説：本館学芸員 奥田 晶子

※事前申し込みは不要です。当日、館内講堂にお集まりください。

観覧料が必要です

## ほんものとの出会い

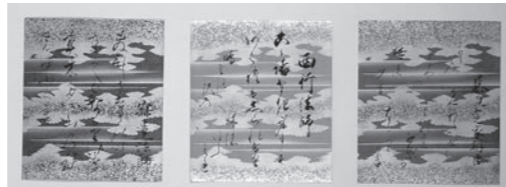
### —常設展示の名品—

常設展示「“ほんもの”との出会い」では、譜代大名筆頭・井伊家に伝来した名宝を中心に80点あまりを展示しています。

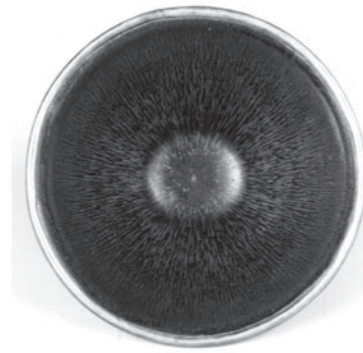
9月27日(月)まで

### 三夕和歌色紙 二条斉信ほか筆

『新古今和歌集』中の、「秋の夕暮」で終わる西行、藤原定家、寂蓮の3首の和歌をそれぞれ、江戸時代の公家3人がしたためたもの。



常設展示の名品



▲建盞禾目天目茶碗（上からの写真）



▲建盞禾目天目茶碗（横からの写真）

さまざまある茶道具の中でも、茶碗は、最も身近に接するものです。そのため、茶の湯の長い歴史を通じて、その質感や形態は吟味され、愛用されてきました。彦根城博物館では、井伊家伝来の茶碗を多く所蔵しています。とりわけ優品と称すべきものに、「建盞禾目天目茶碗」があります。これは、中国・宋時代に作られて日本にもたらされた「唐物茶碗」と呼ばれるものの一つです。手に収まりの良い朝顔形で、全体に細かな線模様が見られます。禾目あるいは兎毫と呼ばれるもので、筆で描いた線とは異なる、不思議な艶やかさがあります。これは、高温で焼く際に釉薬が泡立ち、黒い鉄の結晶が細かく分離した結果、いくつも斑文が表れ、それが連なってできた形です。このような模様を表された黒釉の茶碗は天目茶碗と呼ばれ、その存在は名碗の代名詞のように捉えられてきました。厚いガラス質の釉薬で覆われた滑らかな表面は、

出色の質感を示しています。ここでさらに、茶碗の分類を踏まえて、天目茶碗をめぐる歴史的な展開をみていきましょう。従来、茶碗は、制作地によって大きく3種に分類されてきました。中国で制作された「唐物茶碗」、朝鮮半島で制作された「高麗茶碗」、日本国内で制作された「和物茶碗」です。この分類から茶碗の歴史を概観することができます。まず、室町初期から中期にかけて、現代にまで続く茶の湯の基本的な形式が整えられていきます。そのころ、中国の文物は唐物と呼ばれ、熱心に愛好されました。その中心にあつたのが唐物茶碗であり、特に重用されたのが、天目茶碗でした。しかし、時代が移るとともに、唐物のみ尊重する気風は弱まっています。室町後期から桃山期に入ると、技巧を尽くすことを避けて「冷え枯れた美」を求める侘び茶が大成し、唐物茶碗と対極にある素朴なものにも美を感じる意識が芽生ええました。その結果、民間の日用雑器であつた高麗茶碗が茶の湯に大いに取り入れられることとなります。また

写真の資料は、彦根城博物館テーマ展「井伊家伝来茶道具名品選—名物茶器から直弼まで—」で、9月28日(火)まで展示します。(期間中無休)

(彦根城博物館学芸員 奥田晶子)

## 茶の湯と茶碗—唐物茶碗の魅力—

同時に、茶人達の個々の指向に応じ、京焼などの和物茶碗の制作が、各地で推し進められたのです。

唐物茶碗と高麗茶碗の影響下で、和物茶碗の種類は飛躍的に増大します。茶碗の歴史を単純化して述べれば、唐物茶碗を中心に、多くのバリエーションが追加されて展開したということが出来ます。

## とまきの玉手箱

博物館からのメッセージ



第169回